

“my seminar”, “love seminar”

第7期ゼミ長 氏田 宗利

僕は会社で担当する商売の規模が社内でも相対的に大きいこともあり、仕入先の某鉄鋼メーカーの幹部クラスの方々とお酒を飲む機会が、ままある。そこでの一場面。商社からの出席者として僕も同席した客先とのハードな商談後、会食も派手に終わり、客先をホテルまで見送った。その後、商談・会食とハードな時間を共に過ごしたある鉄鋼メーカーの幹部と「もう一杯」となった。そこで、その方はほろ酔い状態で、「いやー、日本の技術は本当に素晴らしい。我々はこの日本の良さを世界に伝える使命がある。いやー、本当に素晴らしい。」と繰り返した。一般的な鉄鋼メーカーでのキャリアは、製鉄所勤務から始まるそうだ。そこで、ものづくりとは何たるかを徹底的に学び、東京で営業担当となり、その後また製鉄所に戻ってある程度の管理職のような仕事をし、また東京に戻って、ということを繰り返しながら幹部になっていく。彼の発言は、想像するに、自分が見てきたものづくりの現場とそこで得た経験から、日本の良さを感じ、それを純粋に誇りに思っているのであろう。そこには、ある種の“love Japan”を感じる。



オープンゼミにて講演する著者

さて翻って、僕は、この度 2012 年度 OB・OG 総会の幹事を、同期で大学院生の菊盛とともに担当している。この 1 年は、従い、自然と小野ゼミ現役生との接点が多い 1 年になった。その際に、僕がいつも言っていたことは、“my seminar”ということだった。つまり、現役生も OB・OG も含む「小野ゼミ生」唯一の共通点、それは「他ならぬ自分の意志で、大学生活の後半 2 年間という人生でも比較的大切と思われる時期の活躍の場として、この小野ゼミを選んだ」ということである。だからこそ、他ならぬ自分の人生を豊かにするためにも、以上の事実を認識し、“my seminar”なる小野ゼミで全身全霊をもって格闘して欲しい、ということであった。そして、密かに、そうこう格闘するうちに“my seminar”なる小野ゼミをもっと良くしたいと「自然と」思ってもらえればな、つまり“love seminar”になってもらえればなと考えている。

この“my seminar”——そしてそこから派生する“love seminar”——なる意識は、冒頭で紹介した、某鉄鋼メーカーの幹部から感じた“love Japan”と相通じるものがあるのではないか。彼の場合は、“my seminar”ならぬ“my company”での日々の格闘、その現場で感じた日本の素晴らしさが“love Japan”という形で現れていた。現役時代のゼミ活動と、その後の OB・OG としてのゼミへの関わり方も、きっとこれと平行であろう。“my seminar”そして、“love seminar”。

以上のようなことを考えて、いよいよ小野ゼミの一 OB として、「OB・OG の側からもっと小野ゼミを盛り上げていけるような仕組み」を考えていきたいなと思った。これは、後日、というよりも、これから小野ゼミの諸先輩方の力を借りながら取り組むこととして、ここではもう一つのエピソードを。

ちょうど先日、OB・OG 会の打ち合わせで現役生と会話している時に、この仕組み作りの端緒となるべく、重大な告白を現役生にした。その時に、現役生の方からも「実は私も、この OB・OG 会誌の編集の仕組みを変えたいと思っています。」との告白があった。3 年生がそのほとんどのゼミ活動の実質を担うという、ある種の不文律のようなものが存在する（僕が知る限りでの小野）ゼミで、4 年生になっても、しかも実務の負担がかなり大きいであろう OB・OG 会誌の編集を、自ら進んでやっていきたいと表明した彼女の姿勢に、僕は、“my seminar”からの“love seminar”の発現に立ち会った思いだった。



第 7 期同期会に先生をお招きして（著者は右端）